

第一章　デイルクの生い立ち

超常の力を誇り世界に君臨していた古代帝国エリユーシオン。その滅亡から千年が経ち、世界は幾つもの大戦と戦乱と動乱を経て現在を形作っていた。

大陸の西方全域を支配する強大な国家・ナトウース王国。建国当初、天変地異による王都壊滅という憂い目に遭いながらも、その後は勢力拡大を続け、現在では大陸の五分の一を支配するにいたる。人口は一億五千万人、兵力総数は一二〇万人を超す。カドウラ王国、ザイラム公国、フェムトラ都市国家群、シュターレン騎士団領国など複数の国家を属国や保護国として従えるこの超大国にデイルクは生まれ落ちた。

彼にとってこの国は、憎悪の対象でしかなかった。

デイルクが生まれた家は毎日の食べ物にも事欠く貧家であった。デイルクの両親は畑で朝から晩まで必死になって働いたが、収穫した作物は全て地主に取られてしまい、デイルクの口に入ることはなかった。自分の家の畑で取れた作物が、なぜ全て他人に持つてかれてしまうのか、幼いデイルクには理解できなかった。

デイルクの家もかつては小さいながらも自前の畑を有していた。しかし何年か前に発生した冷害による飢饉の際、飢えを凌ぐために畑を担保として金銭を借りた結果、高額な利息を返済することができず、畑を奪われて農奴階級に転落してしまったのである。当時、そのことを指して自業自得だと笑う者もいたが、後日、その者も同じく借金返済が滞っ

て農奴階級に堕ちた。別に珍しいことではない。この当時のナトゥース王国ではそれ当たり前前だったからである。

当時、ナトゥース王国は、「三〇年戦争」という長い戦争の真っ最中であつた。外国との戦争、国内での内戦、貴族たちによる私戦等、争いにつぐ争いによつて国は荒れ、疲弊していた。そのため、社会の底辺に生息する人民への施しなど皆無であり、彼らは今日を生きるために明日を捨てるような生活を余儀なくされていたのである。

デイルクの家では食事はもっぱら屑芋か半ば腐った豆類、あるいは野山で採れた山菜や雑穀類がほとんどであつた。それらすら食べられない時は水だけで過ごす日すらあつた。空腹によるひもじさからデイルクは幾度となく母親にすがつたものである。

「お母さん、もっとたくさん食べたいよ……」

その言葉を聞かたびに母親は悲しい顔をして謝るのだった。

「ごめんね、ごめんね……」

と。

母親の悲しい顔を見るのが辛くなり、デイルクはやがてすがらなくなった。

デイルクにはふたりの姉と弟がいた。ふたりの姉はデイルクが七歳と九歳の時、それぞれデイルクたちが住む地方を治める総督の館へと召抱えられていった。

姉たちを送りだす時、両親が泣いていたのをデイルクは覚えている。そして馬車に乗せられた時の悲しげな姉たちの表情も。

噂によると、ふたりの姉を召抱えた総督は人肉を食べる「狂人」だといわれていた。特に若い娘の肉が好物で、これまでに領内の若い娘たちが何百人と食べられているという。

嘘か真か定かではなかったが、事実、ふたりの姉も帰ってこなかった。

両親が姉たちを売ったということをデイルクは後から知った。しかし、両親を責めることはできなかった。幼いながらも、自分たちが生きていくためだけで精一杯な状況を承知していたからである。

そしてデイルクが一〇歳になった時、両親が死んだ。当時、王国で流行していた悪性の流行病に感染した結果であった。その病は十分な栄養と体力があれば死ぬことのない病気であったが、十分な栄養も取れず、体力もなかった両親はあっけなく倒れ、この世を去った。この年、王国では全土で百万人を超す貧困者がこの病気にかかって病死しているが、話題となったのは国王の四歳になる娘エリアスがこの病気にかかり、手厚い看護の末、奇跡的に一命を取りとめたという話であった。国王はそのことを大層喜び、王都にて盛大な祝賀会を三日三晩に渡って開催したというが、むしろ、社会の底辺で暮らす住人には関係のない話であった。

両親を失ったデイルクと弟のアイテルに待っていた運命は過酷な未来であった。なんと、デイルクとアイテルは地主によって売られ、競売にかけられたのだ。

「おまえたちの親はこの俺に金を返さずにくたばっちまいやがった。だから残った借金はおまえたち自身を売って返せ。いいな」

それが地主がふたりに向かって吐き棄てた言葉であった。

最初に借りた金などつくの昔に払い終わっている。しかし、高額な利子が膨らみに膨らんで、最終的には貴族ですら支払うに苦労する金額に達していたのだ。

貸した金の利息を回収するために、地主からすれば当然の権利を行使しただけかもしれ

ないが、売られる方からすればたまったものではない。

競売場にて、デイルクは全裸にされて壇上に立たされた。健康であることと性別を買い主たちに確認させるためである。だが、当の本人からすれば羞恥の極みであり、たまったものではなかった。思春季に入りつつあった少年にとってこれほどの屈辱はない。

嘲笑が興った。貧相な身体つきだと笑われる。親はいたいという育て方をしたんだ、と笑いながら言われた時、デイルクのなかで何かが弾けた。

「いまにみている……」

心の内でデイルクは憎悪の言葉を吐いた。

「いまにみている……必ず復讐してやるからな！」

デイルクは決意をみなぎらせて見た。自分の目の前にいる、人の形をしたケダモノたちをしかと目に焼きつけた。

幼い彼を競り落とそうとするのは豪奢な衣服と豪華な宝石類を身につけた脂肪の塊たちであった。貧困や苦労とは無縁の生活を送る人種たちだ。人間を家畜として使役し、それを気にすら止めない鬼畜たちの姿だ。そして、デイルクが憎悪し、復讐する対象とした者たちであった。

やがて競売が開始され、デイルクは一般的な労働者の三ヶ月分の賃金と同額で落札された。落札したのは大規模な銀鉱山を所有する富豪であった。胸まで伸びた長い髭を生やし、でっぷりと太ったその男は、威圧的な口調でデイルクに言った。

「いいか、おまえはこれから俺の所有物だ。俺の命令を良く聞き、死ぬまで働け。怠けたら容赦なく鞭を浴びせてやるからな。いいな」

デイルクは無言で頷いた。頷く以外に、いまの彼に何ができただろうか。

首に鉄製の枷をはめられ、鎖で引っぱられながら、デイルクは後ろを見た。弟のアイテルが競売にかけられている最中だった。それがデイルクが見た弟の最後の姿であった。

デイルクが連れて行かれた銀鉱山での労働は激務だった。毎日一八時間、坑道から掘りだされた銀を含む鉱石を運ぶという作業を延々と繰り返す。背負う鉱石の重さに耐え切れず、転倒したことは、一度や二度ではすまない数だ。

「なにしてやる！　もったときびきびと動け！　作業の効率が落ちたらおまえのせいだぞ！」

そう怒鳴られて、現場監督を務める男に鞭で殴られたことは一度や二度ではなかった。デイルクの背中には何本もの鞭の跡が刻まれ、血が滲んだ。激痛を全身に刻みながら、デイルクは機会をうかがった。この場から逃げ出し、自由を得るための機会を。

「……………いまに見ているよ」

そう心の中で繰り返しながら。

ある時、脱走を図ったとして、ひとりの労働者が捕まった。過酷な労働に耐え切れずの脱走であったが、捕まった彼の運命はさらに過酷であった。

「いいか、おまえたち。ここから逃げだそうとした奴の末路がどんなもんか見せてやるからよく見ておくんだぞ。いいな！」

現場監督の男がそう怒鳴り散らすと、他の労働者たちが見ている目の前で、脱走を図った男への私刑が開始された。

脱走を図った男は、涙を流しながらずと「許してくれ……………助けてくれ……………」と許

しを乞うていたが、無駄だった。

脱走を図った男の前に溶けた灼熱の銀が運ばれてきた。溶けたばかりなのか、銀はまだグツグツと泡だっている。現場監督の男の指示で皮の手袋をはめた男たちが脱走を図った男の口を器具を使ってこじ開ける。脱走を図った男は必死になって抵抗するが、身体を荒縄と鎖で固定されているため動くことができない。そして大きく開いた口の中へ溶けた銀が流しこまれた。

「むぐおうおおがおああああおおおッ！」

この世のものとは思えない絶叫がほとばしる。身体がガクガクと小刻みに震え、耳や鼻、さらには目の隙間から水蒸気が昇り始め、やがて腹部や喉の一部を突き破って銀が流れ出てきたところで私刑は終わった。

「いいか、これが逃げだした者の末路だ。よく覚えておけ！」

勝ち誇ったように現場監督の男が怒鳴り散らす。他の労働者たちはみな怯えたようにうつむいたままだ。

だが、ただ一人、デイルクだけが違っていた。

デイルクは好機が訪れたと思った。現場監督の男は見せしめをおこなったことで労働者たちが脱走への意欲を失ったと考えているだろう。だとすれば今夜が隙となるはずだ。デイルクは今宵、脱走することを決めた。

夜、他の労働者たちが寝静まった頃、デイルクは行動を開始した。音を立てぬよう寝床から抜けだすと、小屋を離れ、現場監督の男が寝ている宿直所へと向かった。デイルクが思った通り、現場監督の男は酒を飲んで寝入っていた。彼の傍には銀貨が入った袋が見え

た。デイルクの行動は迅速を極めた。

持ち出したハンマーを振りかざし、現場監督の後頭部を砕いたのだ。

「——ツツッ！」

悶絶する現場監督に対し、デイルクはさらに二度、三度とハンマーを振り下ろした。頭蓋骨が砕け、脳みそが飛び散る。それでもなお、現場監督はピクピクと身体を震わせていたが、デイルクはさらにハンマーを振り下ろし、脳髓を砕いた。ついに現場監督は息絶えた。

デイルクは宿直所にあつたありつたけの銀貨と食料を皮の袋に詰めて背負うと鉱山から逃げだした。事件は朝には気づかれるだろう。すぐに追っ手がやってくるに違いない。それまでに遠くまで逃げなければ命がない。デイルクは力の限り走った。

デイルクの予想通り、夜明けと同時に事件が発覚した。デイルクの脱走と現場監督の男が殺害されているのが発見され、すぐに追っ手が四方に放たれた。

この時、逃げたデイルクの匂いを追跡するために猟犬が放たれたのだが、犬たちは途中で匂いを見失ってしまった。近くに川があつたことから、追跡者たちはデイルクが川を渡って逃げたのだと推測し、川を渡って追跡を続けたが、事実は違っていた。

一晩中走り続けたデイルクは疲れ果てており、川まで辿りついた時にはもう一步も歩けない状態になっていたのだ。かなりの距離を走って逃げてきたつもりだが、それは子どもの感覚であつて、大人たちに馬で追いかけられればすぐに捕まってしまうに違いない。だが、デイルクにはもう走って逃げるだけの体力が残されていなかった。そこでデイルクは一計を案じ、川の流れに身を任せることにしたのである。

岸に流れついていた流木に掴まり、川に身を投じた。溺れ死ぬ危険性もあったが、ディルクは賭けに勝った。

一昼夜の間、川の流れに身を任せたディルクはやがて岸へと上がった。

そこは自分のまったく知らない土地であった。

近くに町が見えたので、ディルクは本能赴くままその町へと向かった。奪ってきた食料は水に浸かつてはや食べることができない状態になっていたが、手元には奪った銀貨が大量にあった。ディルクはまず、餓えた腹を満たそうと考えた。

だが、運命はあくまでもディルクに対し冷酷だった。

町に足を踏み入れてしばらくしないうちに、町のごろつきたちに絡まれてしまったのだ。パンを買おうとした時、袋の中に入っていた銀貨を見られたのが致命的だった。

ボロボロの衣服をまとい、全身が傷だらけで、靴すら履いていない状態のディルクを見て、ごろつきたちは即座に「訳あり」と見抜いたようだった。ごろつきたちはディルクを取り囲むと、裏路地へと連れていき詰め寄った。

「なあ、おまえ逃亡奴隷か？」

「その金、自分の主人を殺して奪ってきた金か？ ん？」

「寄こせよ、俺たちに。おまえなんかよりもずっと有効に使ってやるからよお」

五人もの屈強な大人に囲まれてディルクは成す術がなかった。

隙を突いて逃げようとしたが無駄だった。容赦ない殴打が浴びせられ、蹴りが炸裂する。腹部に強烈な激痛を感じ、固形物が含まれていない胃液を吐き出す。固い地面に叩きつけられて、さらに踏みつけられた。骨が折れる音がした。薄れゆく意識のなか、ディルクは

自分を嘲弄するごろつきたちの声を聞いていた。

「……」

デイルクが気がついた時、彼はゴミ捨て場に棄てられていた。奪ってきた銀貨は全て奪われていた。身体が軋むように痛むのは、全身の幾ヶ所かの骨が折れていたからであろう。

慢心創痕の状態だった。

「……ちくしょう」

デイルクは泣いた。悔しくて、悔しくて、泣かずにはいらなかった。

「ちくしょう……ちくしょう、ちくしょう、畜生ッ！」

泣きながら叫んだ。拳を握り締め、身体を震わせながら、まるで生まれたばかりの赤ん坊のように彼は泣き叫んだ。

デイルクは憎んだ。

自分に理不尽な不幸を強いるこの国を。

デイルクは怨んだ。

自分を嘲笑い、踏みにじる、全ての人間たちを。

「いまに見ている……」

半ば腐りかけている残飯を貪りながら、デイルクは誓った。

「いまに見ている！　いつか必ず、この国に復讐してやる！　何もかも奪い尽くして、何もかも破壊してやる！　いまに見ている！」

最悪な状況下にあつてデイルクの頭脳は冴えていた。

目的を達するためには「力」が必要だ。これまでの人生経験が彼にそう囁いていた。何

者にも虐げられず、何者をも虐げるためには、まずは「力」を蓄えることが重要だ。それは腕力であり、権力であり、財力であった。皮肉にも、それらは全て、これまでの人生でデイルクを虐げてきたモノたちであった。

デイルクは赴くままに行動を開始した。

彼が選んだ道は傭兵だった。

当時、ナトゥース王国では大小様々な戦乱が生じていた。諸外国との戦争、属国との紛争、あるいは貴族や金持ちたちの領地や遺産の相続、土地の境界線や様々な権益を巡るための内戦や私戦など。通称「三〇年戦争」といわれる長い戦乱の時代である。国王マイモンド二世の国政に対する無関心と、それに伴う各地の諸侯らの勢力拡大が戦乱に拍車をかけていた。そのため、正規の軍人だけでなく、私兵や傭兵といったならず者たちにも需要があったのだ。

デイルクがとある傭兵団に入団したのは一二歳の時である。当時、長引く戦乱から傭兵団はどこも慢性的な人員不足に悩まされており、入団はすぐに認められた。子どもいえど武器さえ持てれば立派な戦力、それにどうせすぐ死ぬ、そんな理由での雇用であった。だが、大人たちの大方に予想に反してデイルクはそう簡単にはくたばらなかった。内側から際限なく湧き上がる怒りと憎しみが、デイルクを生かす根源的活力となって彼を支えていたのである。

刃向かう敵に対しデイルクは容赦しなかった。

戦場ではどんな敵にも立ち向かった。自分の何倍もの巨躯を誇る敵兵にも怯むことなく襲いかかり殺した。命乞いや慈悲を乞う声は一切無視して敵兵の命を奪い続けた。かつて

は貧弱だった身体は戦うたびに強くなり、鍛えられた。強くなれば強くなるほど味方から恐れられ、敵からはもっと恐れられるようになった。

『血塗れのデイルク』

とは、戦場におけるデイルクの異名である。「流した血の量で小さな池ができるほど」の凄惨な戦いを潜り抜け、デイルクは強くなった。それもとてつもなく。

「デイルク……あいつは狂犬だ、手に負えん」

「いつか俺たちに牙を向けるかもしれないぞ……」

「いっそ、そうなる前に……」

いつしかデイルクの存在は、敵だけでなく、仲間たちからも手に負えぬ危険な存在と見なされるようになっていたのだ。

傭兵たちの多くは貧困のため食うに困って仕方なく戦場に身を投じた者たちがほとんどである。彼らは勝利よりもむしろ日銭を稼ぐことを目的としており、命をなによりも重んじていた。死んでは元も子もない。戦場では適当に戦い、そこそこの稼ぎと明日へと繋がる命さえあれば良い。そう考える者がほとんどであったのだ。

そんな彼らからしてみれば、血を欲し、貪欲に戦いに身を投じるデイルクは危険極まりない存在であった。彼がいることで敵が本気になり、自分たちの身をも危険にさらす結果になりかねない。それだけでなく、デイルクが内に秘めた凶暴性が、もしかしたら、いつか自分たちにも向けられるかもしれないのだ。

「やるなら早い方がいい……」

こうしてかつての味方が敵になった。デイルクを抹殺するための計画が密かに練られ、

それには傭兵団の団長を筆頭に、多くの傭兵仲間が加担した。

だが、先手を打ったのはデイルクだった。

デイルクが一六歳になって半月ほど経過した日の深夜、傭兵団の野営地で火の手が上がった。当時、デイルクが所属する傭兵団は農業用水の使用権を巡る貴族同士の戦い参加しており、そのため最初は敵方の奇襲攻撃を受けたかと思われたのだが、そうではなかった。その火の手はデイルクが放った叛旗の灯火だったのである。

デイルクは馬鹿ではない。すでに仲間たちの不穏な動きを察しており、自分を葬る計画が進行していたことを知っていたのだ。戦わなければ殺されるのがこの世界の常だ。ならば、デイルクが取るべき道はひとつしかなかった。

古巣の傭兵団に対し、デイルクは容赦しなかった。先ほどまで共に同じ釜の飯を食べていた仲間たちを屠るのに一切の躊躇いはなかった。もう虐げられるのはゴメンだった。奪われるのも、踏みにじられるのも、嘲笑われるのもこりごりだった。

「もうたくさんだ！」

その魂の叫び声に、デイルクの心情の全てが込められていた。

デイルクが所属していた傭兵団にはおよそ一二〇人の傭兵たちがいたが、デイルクの反乱によって団長をはじめとする一〇〇人が殺害された。残った二〇人は友人のジークを筆頭とするデイルクと親しい者たちであり、反乱に味方してくれた者たちであった。

かつての仲間たちを皆殺しにした後で、ジークがデイルクに問いかけた。

「友よ、これからどうするんだ？」

質問に対する答えはすでに決まっていた。返り血を浴びた凄惨な姿を朝陽にさらしながら

ら、デイルクは天を仰いだ。

「戦う。そして勝ち続ける。この世の全てを踏みにじり、虐げるために。俺は断じて奪われる側ではない。奪い尽くしてやる！」

デイルクの宣言にジークが膝について従った。イエンス、カスパルトらデイルクに味方した者たちもジークと行動を同じくした。まだ産声すら上げることすら叶わないほどの小さな勢力。だが、やがてこの勢力がナトウース王国を震撼させることになる。

デイルクの進撃が始まった。

デイルクを団長とする新生傭兵団「デイルク兵団」は、まるで得物を求めて徘徊する肉食獣のような獰猛さで戦場から戦場へと転戦を重ねた。国境線を巡る戦争、属国の自治権拡大を巡る紛争、貴族間の遺産相続に関する私戦など、いくさがあると聞けば何処へでも赴き、ひたすら暴力の解放を続けた。戦場で戦うたびに多くの仲間を永遠に失ったが、増える仲間の数は減ってゆく仲間の数よりもはるかに多かった。デイルクは事あるごとに仲間たちに説いてまわった。

「敵に対する容赦は一切無用だ。喰らい尽くせ！ 自分の命を奪われなくなければ皆殺しにしろッ！」

戦場におけるデイルク兵団の凶暴性は熾烈を極めた。敵と見なした勢力には全滅するまで攻撃を仕掛け、それは降伏や投降を望むすら掻き消すほど猛烈な勢いであったという。団員の数が千人を越える頃には、デイルク兵団が戦場に立つだけで敵軍の戦意が三割喪失する、とまで言われるようになっていた。

もはや恐怖の象徴と化したかのような印象が強いデイルク兵団であるが、一方で、デイ

ルクは団員たちに市民に対する暴力や略奪、殺人や婦女子への強姦といった犯罪行為を禁じていた。幼少期の体験が遠因となっているといわれているが、デイルクの口から直接理由が語られることはなかった。

その代わり、デイルクは貴族や富豪といった富裕層に対しては一切容赦しなかった。敵対勢力にそれらがいた場合、銅貨の一枚にいたるまで奪い尽くしてやった。むろん、その中には貴族たち本人の命も含まれている。戦いにおいて敗北を悟った時、貴族たちは総じて身代金を支払うことで生命の保全を図ろうとするのだが、デイルクが下す結論は常に却下ばかりであった。

普段は口数が少ないデイルクであったが、友人であり副団長であるジークとは良く話をした。兵団の運営に関する重要な会談から他愛のない雑談にいたるまで、時には酒を酌み交わしながら公私をまじえて、デイルクとジークは語りあった。

デイルク兵団は結成三年目にして団員総数二千名を誇るまでに急成長を遂げていたが、その背景にはジークの尽力があったからだといわれている。と言っても、彼が戦場で立てた武勲はほとんどない。ジークの活躍の場はもっぱら後方支援であった。

資金の管理や調達、糧食や物資の確保、敵対勢力に対する諜報活動と情報の収集、雇い主との交渉などなど、兵団の命脈とも呼ぶべき重要な任務は全てジークが担っていたのだ。むろん、デイルクも資金や糧食、情報の大切さは理解している。しかし、ジークのそれには及ばない。才能もあっただろうが、それ以上に、ジークが高度な教育を受けていたことが様々な後方支援を可能にしたといつて良いだろう。

ジークは貴族出身だった。

むろん、そのことをディルクは承知している。承知して副団長の地位を与えたのだ。彼に対する信頼を内外に示すために。

ジークは中堅貴族バエルン家当主の長男としてこの世に生を受けた。一〇歳まで彼は何不自由なく暮らすことができていたといつてよい。身の回りの世話は全て侍女や使用人がこなしてくれたし、飢えによる空腹に苦しむこともなかったし、望む物はくだらない玩具から高価な衣類にいたるまで全てを手に入れることができていた。まさにディルクとは正反対の半生。ゆえに、その分、彼は勉強に力を傾倒することができた。

ジークの父親であるバエルン伯オットーは、事あるごとに息子に言つて聞かせた。

「いいか、ジークよ。この世でもっとも偉大な力は人間が有する知識と頭脳だ。知能が高ければどんな難敵も打ち倒すことができ、頭がよければどんな困難も克服できる。だから息子よ、おまえはとにかく勉強をなさい。多くを学び、多くを知りなさい。学んだことはいつか必ず役に立つはずだ」

父親の言うことを聞いてジークは勉強に精をだした。語学、文学、数学、医学、音楽、歴史、経済、果ては用兵術にいたるまで、それぞれの学問に専属の家庭教師が就くという徹底ぶりで朝から晩まで勉強した。学ぶことが好きだった性格も幸いしたのだろう。ジークは勉強をするつど上達を続け、一〇歳になる頃には並の大人では比較にならぬほど優れた知能を有するにいたつていた。

しかし、突然の不幸が彼を襲う。

父親であるオットーが金鉱山への投資に失敗してバエルン家が破産したのだ。偽の情報に踊らされて屑鉱山を購入してしまい、金の採掘はおろか、坑道の落盤事故によって労働

者に多数の犠牲者が出て鉱山開発が中止になってしまったのだ。多額の負債だけがバエルン家に残された。

借金の形として屋敷や土地、荘園や酒造所、そして奴隷など、バエルン家が保有していた資産は全てが奪われた。むろん、屋敷の地下に蓄えていた金銀財宝も。それでもなお、バエルン家の負債を全て完済することは不可能であった。

父親であるオットーは自殺した。妻であるジークの母親を道連れにして。

「私は頭が悪かったのだ……」

それがジークが聞いた父親の最後の言葉であった。

両親は無理心中を図ってこの世を去って解決したが、残されたジークはまだ長い人生をこれから消費せねばならなかった。それも暗く閉ざされた人生を、である。

ジークは借金の形として競売にかけられ、とある男性貴族にその身を買われた。その男の下での生活は約一年に及ぶのだが、その間のことを、ジークは酒を飲みながら語ったことがある。

「いや、本当に最悪な一年間だったよ。その間に何度、裸にされて鞭打たれたことか。何度、尻の穴を掘られたことか。何度、臭くて汚い吐き気を催すモノをしゃぶらされたことか。いや、本当に、まったく最悪な一年間だったよ！」

笑いながら、ジークは泣いていた。そしてその話をするつど、吐くまで酒を飲み、死んだように眠るのだった。

約一年に及ぶ地獄の日々に耐えたジークは、その後、隙について男性貴族を殺害して逃亡者となった。そして紆余曲折を経て、ディルクがいた傭兵団に入団したのである。

年齢が近いという理由でデイルクがジークを指導するよう命じられた。デイルクは当初、貴族出身であるジークを嫌悪していた。貴族とは彼にとって憎悪の対象であって決して仲間とはなりえぬ存在だったからだ。

「いずれ機を見て殺してやる……」

当初はそう考えるほどの間柄でしかなかった。

だが、行動を共にしている間に、デイルクとジークの間に友情が芽生え始めた。生まれ育った環境がまったく真逆であったにも関わらず、現在は同じ環境で生活しているゆえであつたかもしれない。もしくは、戦場で互いに助け合つたときに生まれた絆がきっかけかもしれない。あるいは、ただ単純に年齢が近かつたという些細な理由だったかもしれない。いずれにせよ、デイルクとジークは友情を成立させ、以後、ジークはデイルクの右腕として活躍するようになった。

デイルクがかつての傭兵団に所属しているとき、ジークに話したことがある。自分がナトゥース王国全体を憎悪しており、いつか必ず復讐してみせる、という野望を。逃亡以来、自分の本音を吐露したことは初めてのことであつた。

ジークは呆れず、笑わず、怒りもせず、真剣な眼差しでデイルクの話聞き終えると、彼に対して協力を惜しまないことを約束した。そしてその約束通り、ジークは常にデイルクに対して忠実であつた。

……ある時、デイルク兵団がとある古城を攻め落とした際、略奪した財宝の山の中からジークが奇妙なモノを発見した。それは紙でも金属でもない不思議な材質を使用して作成された一枚の「カード」だった。裏側には紋章とも国旗ともつかぬ絵柄が刻まれており、

表側にはおぞましい魔物の姿と奇妙な文字が描かれている。ジークはそれを手に取り、デイルクに見せた。

「なあデイルク、これがなんだか分かるかい？」

「？ さあ、知らんな。タロットかトランプの一種か？」

「これはかつて栄えし超常の古代帝国の遺物だ。なんでもその古代帝国では、超常の力を用いて異世界や異次元から魔物を召喚し、このカードに封じ込め、いくさの際に解放して戦力として活用していたといわれている。帝国の崩壊と共に魔物を解放する術は失われてしまったそうだが、カードはこうして時を越えて現在まで残され、古代帝国の存在を今に伝えているようだ。もしこのカードの謎を解き明かすことができれば、封印されている魔物たちを解き放ち、いくさの際の強力な戦力として活用できるかもしれないな」

「……………そんな話、どこで聞いたんだ？」

「子どもの頃、学んでいた歴史学の家庭教師から聞いたんだ。なんでもその家庭教師が言うには、ナトゥース王国では密かにこのカードに関する研究が進められていて、いずれは戦力として活用することを目指しているそうだ。どうだ、興味深いだろう」

胸を張りながら説明するジークに対し、デイルクは信じていない様子で肩をすくめて見せた。

「ふん、くだらん。そんな与太話は酔っ払いでも話すことができる。それよりも兵たちへの分配を始めよう。今回のいくさでは相当な額の戦利品が稼げたんだ。十分な額の報酬を支払ってやろうではないか」

「……………まったく、おまえは現実主義者だな」

苦笑しながら今度はジークが肩をすくめた。ジークとて、カードの話は本気で信じてはいない。しかし、後にこのカードの存在がデイルクらの運命を大きく変えることになろうとは、この時はまだ知る由もなかった。

＊

デイルク兵団はその後各地の戦場で活躍を続け、兵団の規模は結成四年目にして三千名を越え、ナトウース国内ではトゥナイゼル戦団に次ぐ規模を誇る傭兵団へと変貌を遂げていた。

だが、その年に転機が訪れた。

王国暦三二〇年八月一日、国王マイモンド二世が病に倒れ、急死したのだ。後を継いだのは王弟のレイモンドだった。当初、次期国王にはマイモンド王の娘であるエリアス姫の王位継承が有力視されていたのだが、彼女はマイモンド王の死後、行方不明になってしまい、消息を絶ったのである。噂によればレイモンドによって暗殺されたということだが、真相が解明されることはついになかった。

国政には無関心で、酒宴や狩猟、そして好色といったことにしか興味を示さなかった兄王と違って新国王となったレイモンドは国政に対し精力的だった。

王位に就いたレイモンドがまずおこなった政策は、全ての戦争行為の即時停戦だった。王国暦三二〇年当時、ナトウース王国は隣国のエストリア大公国との戦争、属国のシュターレン騎士団両国との紛争、その他、有力な貴族間での私戦や内戦を大小四つほど抱え

ており、さながら国家全体が火薬庫のような状態となっていたのだ。

長引く戦乱によって民には重税が課せられ、人々は困窮し、戦乱によって増大する戦死者数が国の人的基盤や経済的基盤に深刻な打撃を与えていた。生産悪化に伴う食料や物資の不足、治安や秩序の悪化、貧困層の拡大、国家に対する人心の離反などなど。レイモンドはそれらの問題を解決すべく根源であつた戦争行為を止めさせることによって国を建てなおそうとしたのである。

レイモンド王の政策は功を奏し、ナトゥース王国の状況は急速に改善していった。

窮乏したのが有事を食い物としていた傭兵や私兵といったならず者たちだった。国から戦いが消えれば彼らの稼ぎ口がなくなる。食い扶持を失った彼らの一部は武器を棄てて労働者に転職したが、多くは野盗や盗賊、山賊や強盗といった犯罪者と化した。各地で略奪や強盗が激増した。

多くの傭兵団が解散を余儀なくされるなか、デイルク兵団はまだ集団としての秩序を維持していた。他の傭兵団と比較して兵の質が高かったことと軍律が厳しかったこと、それに資金や糧食がまだ豊富に残されていたことが幸いした。

だが、働き口もないままいつまでも三千名の兵を養うことはできない。このままの状態が続けばいずれ兵団が瓦解してしまうことは明白だった。

そこでジークが提案したのが兵団の身売りだった。

「各地を治める諸侯の中には先の戦乱で自前の軍隊を失った者たちが多くいる。その者たちに売り込むんだ。常勝無敗のデイルク兵団なら必ずや支援者が見つかるだろう。上手くいけば地方政権の中枢に深く食い込むことができるかもしれないぞ」

デイルクは頷いた。それは彼も考えていたことだからである。

「確か、ブレスト地方を治めるホーデイル候ルアロズが先の戦乱で自前の軍隊を失っていたはずだ。候はまだ四十歳と若い、すでに不治の病に侵されていて先が長くないと聞く。跡を継ぐ息子ローシュは一一歳とまだ幼い。付け入る隙がありそうだな」

「わかった。交渉は俺に任せてくれ。必ずや結果を持って帰ってきてみせる」

そう言ってジークはわずかな護衛を伴ってブレスト地方へと出立した。

ブレスト地方は王国の南部に位置しており、土地は肥沃で地下鉱物資源にも恵まれ、その富力のほどは王国でも上位に位置している。そのため、かつては強力な騎士団を保有していたのだが、その騎士団は先の戦乱で壊滅している。壊滅させたのは属国のシュターレン騎士団だとされているが、実際はシュターレン騎士団領国に雇われたデイルク兵団の仕業であった。

もし、ブレスト地方を合法的に支配することができれば、そこを中心として地方王国を築くことができるかもしれない。徴兵権と徴税権を欲しいままにできれば、さらに強力な軍隊を構築することも可能だ。そうなれば王国打倒への道が開けたも同然である。

将来への展望を想像しながらデイルクは呟いた。

「頼んだぞ、ジーク」

半月後、帰還したジークがもたらした報せは「朗報」だった。

「喜べ、デイルク。ホーデイル候はデイルク兵団の身柄を引き受けるそうだ」

むろん、幾つかの条件が提示されたが、常識に収まる範囲であったから、デイルクは即座に了承した。

「さあ、いくぞ。新たなる一步の始まりだ」

王国暦三二〇年一〇月一八日、デイルク兵団はホーデイル家の私兵集団として正式に認められた。

その三日後、ホーデイル候ルアロズが急死し、息子のローシュが家督を継いだ。その後、ホーデイル家では、ローシュの親族や古くから仕えてきた者たちが相次いで事故や病気で死亡していくことになるのだが、それはまた別の話である。

第二章 予期せぬ来訪者

王国暦三二三年六月七日、ナトゥース王国では暖かな春が過ぎ去り、季節は本格的な夏へと移行しつつあった。

王国暦三二〇年に王弟レイモンドが国王に就任して以降、ナトゥース王国では大きな戦乱が起きていない。一度、隣国のグロネリア王国との間で、かの国が発行する金貨の金の含有量を巡って戦争が勃発しそうにはなったが、レイモンド王の巧みな外交手腕によって解決を見た。レイモンド王はグロネリアと国境を接する国々に働きかけ、かの国の金貨の質を国際的な問題に発展させることによつてグロネリアに改善を迫ったのだ。グロネリアはナトゥースだけでなく、周辺の国々からも圧力をかけられ、渋々ながら金貨の金の含有量を増やすことで同意した。むろん、内心で舌打ちをしつつだが。

もつとも、ナトゥースとグロネリアが戦争状態に陥った場合、おそらくナトゥースが勝つだろう。グロネリアの国力はナトゥースの六分の一程度であり、軍事的力関係の差はもつとあるからだ。本来であれば交渉よりもいくさに持ち込んだほうが問題は早く解決したであろうが、レイモンド王はあえて事を戦争まで発展させず、あくまでも外交的努力で解決することに終始した。

グロネリアとの開戦を主張するとある有力貴族がその理由を国王に問うたところ、レイモンド王は次のように答えたという。

「民はもはやいくさを望んでおらぬ。望んでいるのは平穏な生活だ。余は国王としてその

願いを叶えるために最善を尽くしたまでだ」

国王が言う通り、民はもはや戦争を望んでいなかった。

国のどこかで戦いが勃発するたびに、国民は悪夢に等しい現実に襲われるのが常であった。重税が課せられ、大切な家族を兵士として徴兵され、町や村が戦場となれば略奪や虐殺が相次ぎ、女であれば子どもでも老人でも強姦され、田畑は荒らされ、家を失って路頭に迷う者もいれば戦いに巻き込まれて命を失う者すら多くいたのだ。しかも勃発する戦いの多くは民衆とはまったく関係ない理由で発生していたのである。ナトゥースの国民にとつてはたまったものではない。

「もういくさはこりごりだ」

というのが、当時のナトゥース国民の共通した想いであった。

レイモンド王は民衆の意思を汲み、隣国との開戦を避けた。為政者としてはまことに立派な思考の持ち主といえよう。

だが、それは同時に、不遜にも王国の打倒を考える者に対し雌伏の期間を与えると同義であった。

デイルク率いるデイルク兵団がブレスト地方の大地を踏み占めてから二年と七ヶ月、その間、デイルクによるブレスト地方の掌握は着実に進んでいた。

現在、ブレスト地方を治める総督のホーデイル候ローシユは若干一四歳の少年である。

まだあどけなさが残る彼を文武の面で支えるのはデイルクとジークの両名であった。

前総督だったルアロズの死後、当初は父親の側近たちがローシユを支えていた。財務を担当するフランコ、治安維持を担当するコリンズ、国の中枢との交渉を担うブルールスな

ど、いずれも実務経験豊富な者たちばかりである。他にも家令のオスローや相談役のバイデンなどもおり、彼らは若い当主を盛り立ててホーデイル家を護ることを誓っていた。

その全員が、デイルク兵団がやって来て半年以内に死亡している。いずれも事故や病死ということであつたが、不審死があまりにも連続して続いたため、領内では不穏な噂が流れた。

曰く、

「側近たちの死は、全てデイルク兵団の仕業ではないのか」と。

その噂はローシュの耳にも届いていたが、若い当主には成す術がなかった。なぜならば、父親の元側近たちの死後、それらの地位を占めたのはデイルクら兵団出身者たちだったからである。

怯える若い当主に対し、デイルクは優しく囁いた。

「ご安心を、若君。我々に任せておけば全て上手くいきますので」

デイルク兵団に対する悪意ある不穏な噂はデイルクも承知している。だが、それは別に恐れるほどのことではなかった。民衆は単純だ。今日よりも楽な明日を迎えることが出来れば、昨日の出来事などすぐに忘れてしまうのである。人心を掴むなど造作もない。極端な話、施行される政策が過去よりもマシであるならば、民衆など容易に篡奪者の台頭を認めってしまうものだ。

デイルクはジークの補佐を受け、次々と新たな政策を断行していった。

まず、領内における税負担率をこれまでの五割から三割へと改め、民衆への負担軽減に

努めた。重い税率は経済活動を停滞させ、長期的に民衆の懐事情だけでなく地方の財政をも圧迫しかねないからだ。減税の実施を民衆は素直に喜んだ。

続いて失業者や路上生活者を吸収するために、総督府の金庫を開いてレベス川の治水対策工事とバムール湿原の開拓事業に乗り出した。金庫を開くことに対する反対意見はあったが、デイルクは反対者を左遷・更迭して事業を実施した。この二つの公共事業が成功すれば広大な大地が農耕地として活用できる。そうならば恒久的に地方の財源を潤すことができるのだ。そのようなことも分からぬ馬鹿は、デイルクには必要なかった。

さらに、腐敗した役人たちの綱紀を肅正するために、賄賂を受け取っていた者、民衆に不当な暴力を振るっていた者、高利貸しや地主たちと癒着している者、盗賊や野盗たちに情報を漏洩して金銭を得ていた者など、不正を働いていた者たちを次々と処分していった。その一方で、身分や地位は低いが有能である者を新たな役人として採用し、行政の運営に支障が生じないように配慮した。

そして最後、総仕上げとして、デイルクが悪の根源と見なす高利貸しと地主たちの取り潰しにかかったのである。

高利貸しと地主たちは不法な方法で不当な利益を享受し、他人の不幸の上に我が世の春を愉しんできた者たちである。彼らから金を借りたら最後、法外な利息を設定され、返せないとなれば負債者は死ぬまで半永久的にしゃぶり尽くされた。家や土地は取り上げられ、妻や子どもを売られ、それでも牛馬のごとく酷使されて働かされ、最後は死が待つのみだ。彼らのせいでいったいどれほどの者が生きながら地獄へ落とされたか見当もつかない。それこそ数え切れないほどいるであろう。デイルクもその一人なのだから。

「奴らを徹底的に叩き潰すぞ。金貸しと土地持ちどもを全員、破滅に追い込んでやる」

デイルクの強い決意の下、デイルク兵団が動いた。

ブレスト地方全体にデイルク兵団が展開し、一二八名の高利貸しと三六五名の地主、およびその家族が捕縛された。

当初、あまりにも突然の出来事に、驚愕した高利貸しや地主たちは声を大にして自らの潔白を主張した。

「いったい、我々がどんな罪を犯したというんだ！」

「金を借りたいと言われたから貸してやったんだぞ！ それのどこが悪い！」

「借りた金を返せない奴が悪い！ そうだろう！ 違うか！？」

罪の意識が欠如している者たちに対し、罪をひとつひとつ告げても時間の無駄だろう。

金を返せない者の両眼を刳り貫いて見せしめしたり、あるいは両手の指を一本づつ金切り鋏で切断したり、小作人の子どもが前を横切ったという理由だけでその一家を焼き殺したり、公衆の面前で婦女子を辱めたり、子どもを売るときに売る子どもを親に選ばせたり、持ってきた金が「汚い」という理由だけで斬り捨てたりと、それらの罪を彼らに言ったところで改心するとは思えなかった。

だからデイルクが告げた言葉はひと言だけであつた。

「お前たちは社会の平穏を害している。それが罪だ。万死に値するほどのな」

本来であればデイルクが言えた台詞ではないかも知れないが、この場合にだけ限って言えば限りなくデイルクの主張が正しいといえた。

捕らわれた高利貸しと地主たちは全員が処刑され、その家族は老人から赤子にいたるま

で全員が流刑地に送り込まれた。流刑地で彼らを待っているのは過酷な鉱山労働であるが、彼らがこの後、どんな目に遭おうがデイルクの知ったことではなかった。

高利貸しと地主を処分し、デイルクは債務者と小作人たちを救出した。一切の返済義務を免除し、没収された家や土地は彼らの手に戻された。そして没収した財産は全額、行政の金庫に収納されたのである。その額、実にブレスト地方の年間予算額の約三倍であった。

これらの政策はデイルク兵団が到来してから一年の内に実行された。そしてこの一年間で、デイルク兵団に対する民衆の印象は一八〇度変わったのである。

「いや、デイルク兵団が来てから生活がだいぶ楽になった」

「いままでの雰囲気は嘘のようだ。まるでたちこめていた暗雲が晴れたようだよ」

「デイルク兵団が来た時はどうなることかと思ったが、まさかここまで良くなるとは思わなかった」

「まったく、デイルク兵団様々だな」

人心を掴むことなど造作もない行為であった。一年前まで漂っていた不穏な噂はどこへいったのやら。悪い噂は掻き消えてしまい、いまはデイルク兵団を称える声だけが響いている。

「デイルク兵団は確かに民衆のためになる政策を施行してくれた。だが、これからもそうであるとは限らない。歴史を振り返れば善王が悪王に変貌を遂げた事例は幾つもある。我々はデイルク兵団に対する警戒を怠るべきではない」

そう主張する者の中にはいたが、その声は他の大多数の民衆たちの声に掻き消されてしまい、大きくはならなかった。彼らが自らの発言の小ささを悔やむかどうかは、まだわか

らない。

民衆同様、若きブレスト地方の総督ローシユの心象も改善し、彼は今やデイルクの傀儡に成り果ててしまっていた。

「これからよろしく頼むよ、デイルク」

と、ローシユは親しげに自分を操る人形使いに感謝するのだった。

そのつど、デイルクはうやうやしく低頭するのだが、下に向けられたその眼光は、以前と比較していささかも衰えてはおらず、むしろより一層の鋭さを増していた。かつて全てを奪われた苦しみをデイルクは忘れてはいない。憎悪の業火は消えてはいないのだ。

「いまに見ている。全てを奪い尽くしてやるからな」

口には出さない。だが、心の中では常にそう叫んでいる。

デイルクはナトゥース王国全体を憎悪している。特に自らを虐げてきた王族や貴族をはじめとする非支配者階級を。いまは偽善者の仮面を被ってはいても、いずれそれを外す時がくるのだ。その時こそが、ナトゥースの歴史に終止符が打たれる瞬間となろう。

ブレスト地方における政治の良道を敷く一方で、デイルクは自らが率いる兵団の強化も忘れなかった。

治安維持を名目とした新団員の確保、盗賊や野盗討伐による実戦訓練の蓄積、ブレスト地方における全ての武器工房の掌握、鉱山の警備や物資や人員の輸送といった安全保障事業を主とする政策予算以外の財源の確保、各地へ密偵を派遣しての情報収集など、来るべき日に備え、兵団の強化を怠らなかった。

「業火がいずれ、この国を飲み込むだろう」

それは予想ではなく、明確な事実の確認であった。平和と平穏が王国全土を席卷している中で、悪意は静かに育まれつつあった。

＊

王国暦三二三年五月一〇日、この日、デイルクは自らの邸宅におり、親友のジークとの会談に興じていた。

ブレスト地方でもっとも栄えている都市はクロレンツという。都市の人口は約二〇万人。四方を堅固な城壁に囲まれた城市で、流入する物資の量や訪れる人の数、それに伴う経済規模はナトウス王国でも屈指の規模を誇る。また、ここはブレスト地方における行政の中枢であり、各種機関の他、総督府、そしてローシュも館を構えている。現在のデイルク兵団の根拠地もここにある。

デイルクが住まう邸宅もここクロレンツにある。砂岩と花崗岩が建築用資材として用いられており、地上三階、地下一階の建物だ。部屋の数は大中小合わせて四〇ほどあり、一個小隊が整列できるほどの中庭や紫水晶をふんだんに用いたシャンデリアが美しい会食室、さらには書庫やワイン貯蔵庫、そして未だ生々しい使用痕が残る拷問室などもある。邸宅は周囲を三〇メートル四方の庭で囲まれており、さらにその周りを煉瓦造りの壁が囲っている。隣人との距離を適度に保つための措置で、邸宅の中で何がおこなわれているか悟られる心配がない。

この邸宅はかつて高利貸しを営んでいた富豪が所有していたが、デイルクの討伐によつ

て富豪が処刑された後、デイルクが買い取った。その富豪は借金の形として取り上げた少女を地下の拷問室で拷問にかけるといふ趣味を持っていたようで、地下室にある拷問室にはいまも血の跡が生々しく残されている。新たに雇った使用人たちによると、この邸宅では夜な夜な少女の幽霊も出るという噂だった。もつとも、幽霊が出るからといって、デイルクの住み心地に変化はなかった。

デイルクとジークは紫水晶のシャンデリアがある会食室で昼食を兼ねた会談に興じていた。この部屋の壁は厚く、また扉も分厚い檜の木で作られているため、室内でどのような会話が交わされているか聞かれる心配がない。

黒檀製のテーブルに絹のテーブルクロスがかけられ、その上に豪華な料理の数々が並べられている。カリフラワーとハーブを用いたサラダ、赤ワインのソースを使用した野生鴨のエグュエット、淡水二枚貝と川魚の蒸し焼き、塩味が利いた玉ねぎと羊肉の串焼き、焼き立てで香ばしい香りが漂うパン類、多種多様な果物がふんだんに盛られた皿、そしてデイルクには黒毛牛の分厚いステーキが、肉が苦手なジークには沿岸地域から取り寄せた鯛のソテーがメインとして出されていた。どれも舌がとろけるような一品ばかりだが、むしろ、ふたりの会談の目的は食事ではない。食事を兼ねて互いに状況の情報交換をおこなったのだ。

複雑な部分を省略したふたりの会話の内容は、要約すると次のようになる。

「ブレスト地方の南部にあるアルギリア山脈で新たに金鉱脈を発見。今後、半年の間に詳しい調査を終了し、一年以内に採掘を目指す。五年以内には採算が黒字化すると見込まれている」

「兵団の団員数が一万二千人を突破。これに伴い、兵団内部での組織改革を実施し、イエンス、カスパルトらを戦将に昇格。また、新たに二名を千人長に昇格させ、二名の戦将と一二名の千人長での組織体制で今後、兵団を運営していくこととする」

「各行政機関における新人事を断行。これまでの業務に対する態度や実施した各種試験の結果を反映した上で昇進と降格を実施。今後、身分よりも実績と能力で人事を決定することとが主流となっていくだろう」

「ブレスト地方、アルガルト地方、レガンタ地方の三地方にまたがって活動していた国内最大規模の盗賊団・ゲルト旅団の討伐に成功。一〇日間に及ぶ戦闘の末、頭目や幹部たちを含む二五〇〇名を殺害、一五〇〇名を捕虜として捕縛。簡易裁判の末、捕虜の内の三〇〇名を新たに処刑し、残りを罪人としてアグラ銅鉱山へ移送した。彼らは今後、そこで生涯を強制労働で過ごすことになるだろう」

「ブレスト地方における新制度として、養老年金や障がい者年金、傷病手当や片親への支援金などを支給する各種基金を設置する予定だ。基金の財源は昨年度からの財政余剰金を当てることとし、今後、余剰金が発生することに民衆への還付を実施することとする」

「ラブロフの武器工房で新しい武器が開発された。名は大砲。鉄製の筒状の武器で、火薬の爆発力を利用して鉛製の砲弾を発射する遠距離攻撃兵器だ。投石器よりも威力があり、攻城戦や野戦で威力を発揮すると予想される」

——他にも幾つかの案件に関する情報交換をおこなわれ、ふたりの業務的なやり取りは終了した。

「いよいよやぐ、場が和む。」

グラスに注がれたワインを一息で飲み干してからジークがいう。デイルクはステーキの最後の一切れを口に含んだところだ。

「万事順調とはいえ、お互いに苦勞しているな」

「そうばやくな。目指す場所が高ければ高いほど、それだけ用いる勞力と苦勞も多いということだ」

「そうは言っても、行政の運営はなかなか難しいよ。特に人事面がな。心の無い金のやり取りだけなら氣楽で良いんだが、人の心となるとそうもいかん。みんな、それぞれ自尊心があるからな。それゆえ貴族出身者と平民出身者の間での軋轢が絶えないよ。まあ、そこをどうやりくりするかが面白いところではあるんだが」

「人の心の闇は深い。そこに利害や怨恨が絡めばなおさらだろう。大半の人間は抑圧されても自分の感情を胸に秘めたまま死ぬが、幾人かの人間はそれをよしとせず實力でもって抗おうとする。俺たちのようにな」

「笑ってばかりはいられないぞ。俺たちを恨む人間は星の数ほどいるんだ。今後増える一方だろう。それこそ中には實力でもって刃向かってくる人間もいるに違いない。これまでは前を見て駆け足で走ってきたが、少し速度を緩めるか？」

「いや、ダメだ。少しでも消極的になれば喰われるか潰されるか、さもなければ緩慢な衰退が待ち構えているのみだ。先を求めるからには今後大胆かつ積極的に行動すべきだろう」

「しかし慎重に、な」

「そうだな」

デイルクらの快進撃は留まることをしらない。これまでに様々な陰謀や策謀を巡らし、その全てをほぼ成功に収めてきた。それゆえ、現在の成功があるのだ。だが、いまは万事が順調とはいえ、今後もそうだとはいえない。油断と慢心が即、死に直結することを、デイルクもジークも承知していた。

「……もつと力が欲しいな」

果物の山から林檎を手に取り、それを指の力だけで半分に分りながらデイルクが呟いた。以前の状況と比較すれば、すでに武力も権力も財力も十分過ぎるほど手に入れたデイルクであるが、まだ足りない。王国の打倒を目指すのであれば、もつともつと「力」が必要なのだ。

「先の戦乱の伝手を使って、属国や隣国との間に関係が構築できないか検討してみようか？ ナトウースを憎む国は決して少なくないからな。グロネリアあたりだったら、秘密裏の共闘工作が可能かもしれないぞ」

ジークが空になったグラスに白ワインを注ぎながら呟く。肉が苦手な彼であるが、酒類に関してはデイルクと比較にならぬほど強い。すでに赤や白のワイン瓶が数本、空になっているが、表情も言葉遣いも素面そのものだ。

「いや、外国との関係を構築しようとするのであれば、ナトウース側の警戒網に引っかかる可能性がある。この国も馬鹿ではないからな。不穏な動きは決して見逃さないだろう。ブレスト地方が躍進した背景にデイルク兵団の存在があることはすでに知られているだろうから、あまりにも目立ち過ぎる行動はまずい」

「だとすれば王国の中央との繋がりが必要になってくるな。王族か、あるいはそれに準ず

る大貴族との間に繋がりを持つことができれば、中央の動きを牽制することができるかもしれない」

「ホーデイル家の人脈を活用するか。ローシュを傀儡とし、幾らかの財宝を献上すれば、ある程度 of 関係を築くことができるだろう」

「だったら近日中に名簿を作成しておくよ。中央での影響力を持つ王族や貴族たちの名簿をな」

「よろしく頼む」

一定程度の方向性を経て、ふたりの会話が終了しようとした時だった。

ゴンツ、ゴンツ。

扉に設置されている呼び鐘が重い音を響かせた。続いてデイルクとジークを呼ぶ声も聞こえてきた。

「団長殿、副団長殿、いまよろしいでしょうか？」

声の主は室外で待機している警備の団員のものだった。フキンで口元を拭いながらデイルクが答える。

「構わんど、入ってきてくれ」

入室の許可を得た団員が一礼して入ってきた。

「申し上げます。ローシュ総督からの使者が参りました。大至急、お二方に総督府に来ていただきたい、と。詳しいことは聞いておりませんが、なんでも、重大な問題が発生したそうで……」

報告を受け、デイルクとジークは苦笑し、肩をすくめてみせた。

「やれやれ、またか」

というのがふたりの率直の感想であった。ローシュを傀儡としたは良いのだが、その結果、彼は少しでも問題が生じると自分の力では解決しようとせず、全てをディルクとジークに委ねてしまう懦弱な体質と成り果ててしまったのである。どうでもいいような相談が多いため、多少、わずらわしくあるのだが、だからといって無下にできない。間違つて下手な対応をされては、それはそれで困るからだ。

「敬愛する総督殿からのお呼び出しだ。行くでしょう」

「さて、今回はどんな悩み事を相談されるのやら」

ディルクもジークも軽い気持ちで席を立った。またいつものことだ、そう思つて。だが、この呼び出しがまさか彼らの運命を加速させることになるうとは、この時はまだ想像すらしていないのであった。

*

ブレスト地方を治める総督府はクローレンツのほぼ中央に位置している。名はクローレンツ城、またの名を「光の城」と呼ぶ。

この城は、要塞としての防衛機能よりも、居住性を無視した豪華さを追及した造りとなつており、外部からの光を内部に取り入れるために無駄に多くの窓が設置され、建物の中には故意に広い空間が設けられて解放的な造りとなっている。床や天井は匠たちの手によつて描かれた壁画で埋め尽くされており、装飾品には水晶をはじめとする多種多様な宝石

類の他、金や銀といった貴金属が大量にもちいられていて、外から差し込む光を浴びて幻想的な輝きを放つのだ。光の城と呼ばれる由縁である。城の内部には千人を収容できる劇場や一〇〇人が一度に会食できる会食室、巨大な地下金庫室、数十万冊の書物を収納した図書室、各種行政機関の執務室、さらには築材に琥珀のみが用いられた貴人専用の客室などがある。宿泊した者はみな一様に感嘆するそうだ。

「戦火に巻き込まれたら一瞬にして全てが奪い尽くされそうな城だな」

とは、総督府に足を踏み入れるたびに思うデイルクの皮肉な感想であった。この城が敵陣の根拠地であつたならば、デイルクなら間違いなくそうするだろう。

総督ローシュは執務室で待っているとのこと、デイルクとジークはまっすぐそこへと向かった。金と銀の刺繍が施された無駄に柔らかい赤い絨毯を歩くこと五分、ふたりは執務室に辿りついた。

「ローシュ総督、デイルクです。お呼び出しを受け、参りました」

扉を叩き、そう告げると、中ですぐに反応があつた。

「ま、待っていたぞ、デイルク。それにジーク。さあ入っておくれ、相談したいことがあるんだ」

扉が開き、現れたのは、背が低く、栗色の髪の毛が印象的なまだあどけなさが残る少年であつた。表情には自信が乏しく、動きが挙動不審で落ち着きがない。声には覇気がなく、心の弱さが内側から滲みでているようだ。彼こそがデイルクの傀儡である若き総督ローシュその人である。

一体何事が生じたのであろうか。内心で首を傾げつつも、デイルクは深く考えず執務室

に足を踏み入れた。

足を踏み入れて、気づいた。

室内に先客がいたのだ。

窓際の椅子に座っていた。若い、そして美しい娘だった。

大きな瞳はまるで大粒のエメラルドのように美しく、日差しを浴びて輝く金色の髪は黄金でできた繊維のようであり、肌は処女雪のように白く、身体は細くしなやかだった。端正な顔立ちはキリツとしており、可憐さよりもむしろ意思の強さを感じさせる。いままで女性に心を動かされたことなどなかったデイルクであつたが、その娘を見て、自らの内心に芽生えた動揺に驚きを禁じえなかった。

だが、本能よりも理性が働いた。

デイルクは心の動揺を悟られることなく押し殺し、代わりに打算と計算による観察を開始した。娘の肌は純白で美しいが、所々汚れている。長い髪も手入れがされておらず、何本かの髪が刎ねている。よく見ると、全身に薄っすらと傷や痣の痕が見受けられた。そしてなにより気になったのは、娘が着ている服だった。彼女は囚人服を着ていたのだ。

「訳あり、か……」

デイルクは瞬時に見抜いた。相当な厄介者だな、と長年の勘が告げている。しかし、なにも気づかない振りをしてローシュに問いかけた。

「総督殿、あちらのご令嬢はどなた様ですか？」

「えっと、その……」

デイルクの問いに対しローシュは戸惑った。正直に答えるべきか否か、彼なりに考えた

のだろう。

その努力を無駄としたのが問題の娘自身であった。椅子から立ち上がると、気品溢れる優雅な動作で一礼し、身分を明かしたのだ。

「名乗らせていただきます。私の名は、エリアス・バルエット・リグエス・ナトゥースと申します。以後、お見知りおきを」

「……ナトゥース？」

「はい。私は、ナトゥース王国前国王マイモンドの娘であり、この国の正当な王位継承者です」

「！ まさか……」

「ほ、本物の姫様！？」

柄にもなくデイルクが驚き、追従するようにジークも驚いた。

ふたりが驚いたのも無理はない。マイモンド王の娘エリアスといえば、マイモンド王の死の直後から消息不明とされてきた人物だからである。陰の噂によれば、自らの王位継承を正当化するために叔父であるレイモンドによって暗殺されたとされていたが、まさか生きていたとは！ いや、それよりも、なぜここにいるのか。さすがのふたりにとっても想像を超えた出来事であった。

「いったい、どういうことですか？」

デイルクは思わずローシュを見た。明確な回答は期待できそうにないことは承知していたが、問わずにはいらなかったのだ。

「えっと、その、あの……」

案の定というべきか。問われたローシュはどのように説明すれば良いかわからぬ様子で口ごもってしまった。何か言いたい様子だが、それをどのように表現すればよいのか、自信欠乏症のローシュにはその手段が欠落しているのだ。

「その質問に対しては私の方から答えさせていただきます」

不甲斐ないローシュに代わって口を開いたのは当事者たるエリアス姫であった。彼女は、ローシュの一万倍ほども落ち着いた態度を保ったまま告げたのである。

「私がいまこの場にいる理由は、ブレスト地方の総督であるローシュ殿にぜひ協力していただきたかったからです。ローシュ殿のお父上であられる前総督は我が父の遠類にあたる方。そして無二の友人でもありました。ゆえに、ローシュ殿なら私に力を貸してくださると思ったからです」

「なるほど……して、その協力の内容とは？」

「叔父である現国王レイモンドの打倒、そして彼からの王位の奪還です」

「！」

全員、目が丸くなり、絶句してしまった。姫の過激な提案に対し、ディルクのみならず、ジークも、そしてローシュも驚きを隠せない様子だ。

三人の中で真っ先に驚きを鎮めたディルクが姿勢を正した。そして問いかける。

「……しかし、なにゆえの王位奪還のですか？ レイモンド王の治世は極めて安定しており、巷では彼のことを名君と呼ぶ声も多いとか。あえていま、平穏な世を破壊するような愚挙である王位篡奪を目論む理由を、願わくばお聞かせいただけますか？」

「王位のだ・っ・か・ん・です」

デイルクの言葉を強い口調で訂正しながら、エリアスはデイルクに視線を合わせた。デイルクがこれまで見た視線のなかで、姫の視線はもともと強い視線だった。決意の二文字がそのエメラルド色の瞳に宿っているようだ。

「いいでしょう。なぜ私が王位奪還を目指すのか、その理由をお答えいたします」

……話は三年前まで遡る。エリアスの父親である前国王マイモンドが病に倒れ、ほどなくして没した頃だ。

当時、王宮では次期王位を巡ってふたつの勢力が対立していた。ひとつは王弟であるレイモンドを支持する一派であり、もうひとつが王女であったエリアスを指示する一派だ。

選王会議を開催するにあたって両勢力の舌戦は紛糾した。

「次期国王は前王の一人娘であられるエリアス様が就くのが妥当だ。なぜならば、姫こそが正当な王位継承者であるからだ」

「否！ 血統のみで王位を保てるものではない。実績・名声ともにレイモンド閣下は他の王族方の追従を許さぬ。それにより、姫はまだお若い。今回は国のためを思っ自重すべきではなからうか」

「若き姫君を王位に推戴し、我ら臣下一同が下から支えることによって、国政の安定を図るべきだ」

「強力で有能な君主こそ、いまの我が国にとって必要なお方だ！」

「エリアス姫こそが王位にふさわしい！」

「いや、レイモンド閣下こそだ！」

王族や大貴族などが集まって開催された選王会議は、招集から半月が経過しても方向性

が定まらず、対立するばかりで拉致があかない。そのうちにどちらにも過激な一派が出現し、相手方の謀殺を図ろうとした。相手方の擁立者を亡き者にすることによって、自らが支持する者を王位に就けようとしたのである。

これに先制した対処をくわえたのがレイモンドであった。王位を巡り、王国が二分する大乱に発展することを防ぐために、彼はあえて覇道を進むことを選択したのだ。

王国暦三二〇年十一月一日、レイモンド一派によるエリアス一派への攻撃がくわえられた。攻撃に参加したのは先年、一介の傭兵団から正規の騎士団に取り立てられたレイモンド直属の騎士団・トゥナイゼル騎士団である。作戦の立案は内密に進められ、そして遂行された。

十一月一日の深夜、エリアス一派は王宮の一角にて今後の行動に関する会議を秘密裏に開催していた。集まっていたのは王族のルトルド公爵、大貴族のバラモン侯爵、銀行の経営者であり資産家のルブル伯爵など、総勢二三名の有力者たちである。エリアスはいなかった。彼らにとってエリアスは担ぐための御輿であってその実力や人格にはなんら期待していなかったからだ。エリアスが持つ真の価値など知らずに。

「レイモンド一派を武力によって打倒すべきだ！」

会議にてその声が大勢を支配するにいたったが、時すでに遅かった。トゥナイゼル騎士団が総力を挙げて王宮を攻撃し、乗り込んだのである。

戦闘が勃発し、そして半時とかからず終結した。

エリアスを支持していた王族や貴族たちはほぼ全員が殺害された。そして彼らの象徴であったエリアスは捕らえられ、王都から遠く離れたグライス山の頂上にある古城に幽閉さ

れることとなったのである。

レイモンドはエリアスを送り出す際、その出発に立会った。

「本来であれば命を奪って将来への禍根を根絶することこそが最良の策なのだろう。だが、姪の命を奪うは忍びない。ゆえの追放措置だ。国の平和と安定のため、受け入れてくれるとありがたい」

それが叔父の別れ際の言葉であつたが、エリアスからしてみればたまつたものではない。自らが預かり知らぬ間に事が勃発し、いきなり身分を剥奪されて自由を奪われたのだ。屈辱と怒りの炎を両眼にたぎらせながら、エリアスは内心で誓いを立てた。

「いまに見ているがいい……」

必ずや叔父を王位から引きずり下し、王位を奪還してみせる。

そう決意して、エリアスは王都を去った。

古城での生活は決して悪くはなかった。エリアスの居住区域は改装されて豪華な調度品が用意されたし、身の回りの世話をする侍女たちもダース単位で揃えられた。食事の量と質は王宮のソレと比較して遜色のない物が提供されたし、冬場は一日を通して火が焚かれ、飢えや寒さとは無縁の生活が送れるよう配慮されていた。書物も、絵画も、美術品も、楽器も、宝石も、望めばすぐに用意された。時には著名な演奏家や有名な道化師が古城を訪れ、娯楽の提供にも事欠かなかった。

レイモンドとしては姪が古城で穏やかに暮らしていけるよう配慮したのだろう。だが、エリアスは憎悪を膨らませる一方だった。

ある日、エリアスは信頼する侍女に語ったことがある。

「私は優雅な生活を営む飼い犬よりも、名誉ある野良犬としての道を選ぶ」

驚いた侍女はそのことをエリアスを監視している衛兵に報告すべきか迷ったが、結局は胸にしまっておくことにした。姫の信頼を裏切れない、という気持ちが強かったからだ。それにこの職を失えば実家への仕送りが出来なくなってしまう。エリアスが覗かせた唯一の隙は、こうして表ざたになることを防がれたのであった。

エリアスは密かに動いていた。侍女たちを手なずけ、自分を監視する兵士たちを籠絡させ、王都への報告に虚偽を混ぜて油断を誘った。その作業に、エリアスは実に半年もの時間を費やした。

「叔父よ、いまにみているがいい……」

エリアスは心の中で叫んだ。憎悪を込めて咆え叫んだ。

「自分を殺さなかったことを後悔するがいい。必ずや復讐を遂げ、王位を奪還してみせるッ！」

と。

エリアスには力があつた。いまこの場では発揮できぬ力だが、その力を使えば一国をたやすく制圧できるほどの力がだ。それが彼女の力の源泉であり、そして切り札であつた。

その後、エリアスはさらに時間をかけて油断を誘い、隙を突いてわずかな側近たちと共に古城を脱出した。そして各地に身を隠しながら逃亡生活を続け、王国の領土をほぼ横断する形でブレスト地方へと逃げてきたのである。ブレスト地方を治めるローシュの助力を得るために。

「……以上が、私が王位奪還を目指すにいたった理由です」

「なるほど。それは随分とご苦勞をなされたようで……その心中、察するにあまりあります」

話を聞き終え、デイルクはうやうやしく低頭した。端から見れば心から相手を同情し、思いやつているように見える。しかし、これは完全に演技であり、内心で吐露した本音は口にした言葉とは裏腹のものであった。

「なにが王位奪還だ。結局、この娘は自分が叔父に先手を取られたことが悔しいだけじゃないか。単なる逆恨み、否、わがままだ。これではたとえ王位を奪い取ることができたとしても、長く維持することはできないだろうな」

だが、この好機を利用しない手はない。エリアスは前国王の娘で、王位の継承権も保有している。この二点だけでも十分に利用する価値がある。偶然にも懷に飛び込んできたこの幸運、存分に活用させてもらおうとしよう。

「この娘を利用する。そして王国に破壊と滅亡をもたらしてやる」

悪意を込めてデイルクがそう結論づけた時だった。

後ろに控えていたジークが声を発した。

「あの……ひとつお聞きしてもよろしいでしょうか」

「なんででしょう」

「あなたは先ほど、これまでの経緯を話すなかで自分には「力」があるとおっしゃった。それは發揮すれば一国を制圧できるほどの「力」だと。その「力」がどのような「力」であるか、もしよろしければ教えていただけないでしょうか」

デイルクは一瞬、見当違いな質問かと思ったが、ジークはもともと貴族出身であり、王

家や宮廷に関する様々な秘事に精通している。ゆえに、エリアスの会話の一端から、なにか思い当たる節があつたに違いない。

ジークの質問に対し、エリアスは一瞬、沈黙した後、口を開いた。彼女なりに考えて、話すべきだと結論したのでろう。おもむろに話だした。

「私が有している力……それは、超常の古代帝国が残した遺物を用いて魔物を召喚し、使役する力です」

「！ やはり！ その遺物とは、このカードのことではないですか？」

半ば叫ぶように言いながらジークが取り出したのは、以前、とある城を攻め落とした時に応酬した戦利品の中に混ざっていたカードだった。あの時以来、ジークはお護り代わりとして持ち歩いていたのだ。

エリアスが静かに頷いた。

「はい、そうです。そのカードのことです」

ジークが色めき立った。狂喜の感情を爆発させ、人目もはばからず、驚きと喜びの叫び声を上げて身を乗り出す。

「本当ですか！？ 信じられない！ もし、可能であるならば、いまこの場にてこの魔物を召喚してみてください。もし本当に召喚できれば、その力は大きな戦力になる！」

「わかりました。私の力を端的に示すためにも、ぜひともやらせてください」

ふたりのやり取りを聞いてデイルクは呆れた。

「おいおい、本気か？ 勘弁してくれ、まったく」

と内心で思いつつも、口にはださない。超常の古代帝国に関する伝説など、彼は信じて

いないからだ。だから好きにさせたのだ。どうせそう時間を取ることなく済むだろう、そう考えて。

ジークからカードを受け取ったエリアスが呪文めいた言葉を口にしはじめた。

「トルク・レトム・ナザフ、アグル・ケルド・フフル、サブル・ナブサ・レムド、アルガ・レホマ・セドラ……」

それはいままで聞いたことがない言葉であった。聞いているだけで背筋に悪寒が走り、不快感で全身の毛が総毛立つような言葉だ。普段、自分たちが口になっているナトウース語とは明らかに違う。否、大陸の他のどの国の言葉とも異なっている異質な言葉だ。まるで、異なる文明形態によって成立したとしか思えない言葉だった。

「まさか、な……」

超常の古代帝国の伝説をディルクは信じていない。そんなものは狂人の妄想であって史実ではない。そう思っている。

だからこそ……信じていないからこそ、目の前で発生した異常事態に驚かずにはいられなかった。

エリアスが静かに言葉を終えた。

「……出でよ、猿魔鬼・ゴユグルグ」

突如、何も無い空間に赤い光を放つ魔方陣が出現した。

そしてその魔方陣を裂いて出現したのである。

背中に蝙蝠のような翼を持ち、ゴリラ以上の巨躯を有する、赤い目を爛々と輝かせた凶暴な形相をした巨大な猿が、だ。

「オギヤアッ！ オギヤアアアアアアアッ！」

産声のような咆哮を発し、巨大な猿の化け物がエリアスの前に立ちはだかった。自らを召喚した彼女を、まるで母親として慕うかのように。

「な、な——ッ！」

部屋にいる男たちは誰もが例外なく驚いた。デイルクは驚愕で目と口を大きく開けたまま硬直し、ジークは畏怖と狂喜を混ぜ合わせたような表情で絶句し、ローシュにいたっては腰が抜けたのか座り込んでしまい、失禁までしている有様だ。誰もが非現実的な光景に驚かずにはいらなかった。

「まさか……そんな……」

「凄い！信じられない！」

「あわわわわ……」

驚愕する男たちを見やりながら、エリアスが勝ち誇ったような声を放った。

「いかがですか、私の力は。信じていただけましたでしょうか」

信じるものにも、実際に魔物を召喚されたのでは信じないわけにはいかない。大胆不敵なデイルクとて、自らの考えを否定せずにはいらなかった。

「伝説は真実だったのか……しかし、いったい、どうして召喚の方法を……？」

この後に及んでもはや嘘をつく必要はない。その問いに対してもエリアスは真実を用いて回答に応じた。

「王家に伝わる伝承によれば、ナトウース王国の開祖アルジャーノ一世は、歴史の彼方に葬られた超常の古代帝国エリユーシオンの末裔だといわれています。彼はナトウース王国

を建国するにあたり、古代帝国が残した遺物であるこのカードを使って異形の軍勢を組織し、王国を開闢したと伝えられています。王国建国後、アルジャーノはカードを使用することを禁じましたが、魔物の召喚方法は代々、王家の者が秘密裏に受け継いできたのです。いずれ再び、このカードを駆使する時が訪れるであろうと予測して」

「なるほど……そうでしたか……」

得心がいった。そして姫が自らに「力」があるということにも納得した。確かにこの力は、国をも滅ぼしかねない強大な「力」だ！

表面には出さず、心の中でディルクは笑った。この千載一遇の好機を存分に活用すべきだと考えて。

エリアスがカードを払う仕草を見せ、呪文を唱えた。すると、猿魔鬼・ゴグulgなる異形の怪物が虚空へとその姿を消した。まるで雨上がりの空にかかった虹のように、存在の痕跡すら残さずに。

「そういえば、まだ返答を聞いていませんでしたね。ローシュ殿は私に協力していただけるのでしょうか？」

そう言つてエリアスはローシュを見た。ブレスト地方の若き総督は、口から泡を噴いたまま気絶し、床に転がっている。とてもではないが、答えられる状態ではなさそうだ。だからこそ代わりにディルクが返事をしたのである。その言葉こそが、実質的にローシュが発する言葉と同義なのだから。

「ローシュ総督の臣下を代表して自分が代わりにお答えさせていただきます。姫様の協力の申し出、ぜひ受けさせていただきます。必ずやあなたの様の目的を叶えてみせましょう」

エリアスは聡明な娘だ。ここまでくればもう理解した。このブレスト地方の真の実力者が誰なのかということ。

デイルクに対し、エリアスはにこりと微笑んだ。それはデイルクの笑みに似た、悪意を内に秘めた危険な笑い方だった。

「ありがとう。それで、あなたの名前は？」

「デイルク。血塗れのデイルクと申します」

「！　あなたが、あの……：戦場の死神……：」

「ご存知のようで光栄です、姫。このデイルク、微力ながら生命を賭して、あなたに協力させていただきますぞ」

「あなたが私の味方となってくれば心強い。これからよろしく頼むわ、デイルク」

「はッ」

……：こうして秘密裏の協定が結ばれたのである。それは王国全土を震撼させることになる大事件の序曲であった。

続きは本編にて